３．２　事故当日の状況に関する情報

３．２．１　気象及び余震等の状況

（１）気象等の状況

大川小学校に近い２箇所のアメダス観測点における事故前後の気象データを次表に示す。

観測点	石巻[1)]		雄勝[2)]
時刻	降水量※	気温	降水量※
１４：４０	０．０	１．９	０．０
１４：５０	０．０	１．６	０．５
１５：００	０．０	１．４	０．０
１５：１０	０．０	１．２	０．０
１５：２０	０．０	０．９	０．０
１５：３０	０．０	１．０	///
１５：４０	０．０	０．９	///
１５：５０	０．５	０．６	///
１６：００	×	０．４	///
１６：１０	×	０．４	///
１６：２０	×	０．２	///
１６：３０	×	０．１	///
１６：４０	×	０．０	///
１６：５０	×	０．１	///
１７：００	×	０．２	///

[1)]石巻観測点（所在地：石巻市泉町４）。地震による通信障害の影響で、１６時から１７時の降水量が欠測となっている。
[2)]雄勝観測点（所在地：石巻市雄勝町雄勝寺４）。津波により観測機器が壊れたため、１５：３０から観測が行われていない。

※降水量欄における記号等の意味は、下記のとおり。
０．０：降水量はあるが０．５㎜ とするに足りない場合
×：欠測の場合
///：欠測または観測を行っていない場合

【出典】気象庁ホームページ「気象統計情報」

震災当日の北上川河口域における降雪については、福地水門（大川小の西南西約５㎞）に設置されていた河川監視カメラの映像、北上中学校付近（大川小の北約２．５㎞）から撮影された月浜第一水門付近への津波来襲の様子を撮影した動画のいずれにおいても、地震発生から大川小学校付近へ津波が来襲する前までの時間帯において降雪が確認できる（次ページ写真参照）。

また、地域住民等の聴き取りにおいては、大川小学校付近において、津波来襲前に雪は降っていなかったという証言もあるものの、校庭における降雪についてかなり具体的な状況を証言する者もいた。

福地水門に設置された河川監視カメラの映像

※映像解析から画面の時刻表示は約１６分進んでいたことが確認されており、実際の時刻は 14:46 頃、すなわち地震発生直前である。

以上のことから、大川小学校付近では、地震発生から津波来襲までの時間帯において、降雪があったものと認められる。ただしこの降雪は、地面に降り積もるほどの量ではなかった。

なお、地震２日前の３月９日、石巻のアメダス観測点では１日計１３cm の降雪があり、翌１０日時点の積雪１１cm という記録が残されている。また、雄勝のアメダス観測点では、地震前２日間の降水量として、６．５mm（３月９日）、０．５mm（３月１０日）と記録されている。この残雪について、地域住民を対象としたアンケート調査結果によると、長面・尾崎を除く大川地区住民の約４５％が「雪はすべて溶けており、残っていなかった」と回答し、「日当たりの悪い場所など一部だけ」「山林の中など、ほとんど人が立ち入らない場所に」残っていたとの回答は合わせて約３割である。このことから、震災当日の大川地区には、２日前の降雪の残雪は、ほとんど残っていなかったか、残っていてもごく一部であったものと推察される。

（２）余震の発生状況

地震当日、１４時４６分の本震後も計測が続けられていた震度観測点のうち、大川小学校に最も近い２地点（同校からの距離約４km の「石巻市北上町」、同じく約１２km の「石巻市大瓜」）における当日１７時までの観測結果を次表に示す。

No.	時刻	北上[1)]	大瓜[2)]
１	１４：４６	震度６弱	震度５強
２	１４：５１	震度３	震度２
３	１４：５４		震度３
４	１４：５５		震度１
５	１４：５７		震度１
６	１４：５８		震度２
７	１５：０１		震度１
８	１５：０３	震度２	震度１
９	１５：０５	震度２	震度２
１０	１５：０６		震度３
１１	１５：０８		震度２
１２	１５：１１		震度１
１３	１５：１２	震度３	震度２
１４	１５：１５		震度２
１５	１５：２０		震度１
１６	１５：２１		震度１
１７	１５：２２		震度１
１８	１５：２３		震度３
１９	１５：２５		震度３
２０	１５：２９		震度１
２１	１５：３０		震度１
２２	１５：３４		震度１
２３	１５：３５		震度１
２４	１５：３６		震度１
２５	１５：４０		震度１
２６	１５：４４		震度１

No.	時刻	北上	大瓜
２７	１５：４６		震度１
２８	１５：４８		震度１
２９	１５：４９		震度１
３０	１５：５２		震度１
３１	１５：５４		震度１
３２	１６：０１		震度１
３３	１６：０３		震度１
３４	１６：０４		震度２
３５	１６：０５		震度１
３６	１６：１０		震度１
３７	１６：１４		震度２
３８	１６：１７		震度１
３９	１６：２５		震度２
４０	１６：２８		震度３
４１	１６：３０		震度２
４２	１６：３１		震度１
４３	１６：３４		震度１
４４	１６：３６		震度１
４５	１６：３７		震度１
４６	１６：３７		震度１
４７	１６：３８		震度１
４８	１６：４０		震度３
４９	１６：５４		震度２
５０	１６：５４		震度２
５１	１６：５６		震度１

【出典】仙台管区気象台提供資料

１）石巻市北上町（イシノマキシキタカミチョウ）観測点（所在地：石巻市北上町十三浜字東田５０-７）。１５：１２分以降は、震度計が津波により流出したため観測記録なし。

２）石巻市大瓜（イシノマキシオウリ）観測点（所在地：石巻市大瓜字鷲ノ巣４２-２）。

この２つの観測点のうち、大川小学校に近い位置にある「石巻市北上町」では、観測記録が残る地震は計５回（本震を含む）にとどまるものの、より遠い位置にある「石巻市大瓜」と比べてより大きい（４回）又は同等（１回）の震度を記録している。また「石巻市大瓜」では、この間に計５１回の地震が観測されており、数分ごとに地震の揺れに見舞われていた。

震災当日、釜谷地区にいた地域住民等の中には、この余震について「揺れがおさまったという感覚はなく、強くなったり弱くなったりしながらずっと揺れていた」「ずっと大きな揺れが続いていた気がする」などと述べる者がおり、その大きさも体感としては震度３以下とは思えないとの証言があった。

これらのことから、震災当日の大川小学校付近においては、本震の発生以降も、少なくとも震度１～３程度、現地にいた人々の体感としてはそれ以上の大きさの余震が、ほぼ継続していると感じられるような間隔で続いていたとみられる。

（３）学校周辺の被害状況等

地域住民等の証言によると、本震発生後の釜谷地区内においては、屋根瓦に被害を受ける、エアコンの室外機が落下しかかるなど、地震による被害が見受けられた。しかしながら、家屋全半壊などの大きな被害があったとの証言はなかった。

また、学校近隣を通る道路の地震による被害状況については、次のような証言が得られた。

- 釜谷地区内を通る県道については、少なくとも谷地中から釜谷にかけて、通行の支障となるような被害はなかった。
- 三角地帯のすぐ上流側、堤防上を通る県道３０号線（河北桃生線）の橋（富士川橋）は、地震により橋と道路の間に段差ができて車両通行できない状態となっていた。
- 堤防上の県道３０号線（河北桃生線）は、さらに上流寄りの間垣付近（針岡地先）で路面が波打ったようになっており、車両通行が困難（やっと通れる状態）だった。
- 釜谷交流会館前の道路には、路面にひび割れがあった。

これらのことから、堤防上の県道３０号線（河北桃生線）で三角地帯より上流部分に交通に支障のあるような被害があったことを除き、大川小学校周辺の道路には交通に支障をきたすような大きな被害はなかったと言える。

さらに、学校周辺の道路の混雑状況については、地域住民等の証言によると、次のとおりである。

- 長面方面から釜谷地区を通る県道については、それほど多くの通行量があったわけではなく、地震発生から津波来襲まで、一部の一時的な渋滞を除き、ほとんど渋滞はなかった。
- 釜谷交流会館と学校の間の道路、学校正門付近の県道については、迎えに来た保護者の車が数台停車していたり、スクールバスが路上停車（及び校地内にバックで進入）をしていたことから、一時的に、車が詰まる状態になっていた時期があった。
- 津波来襲の直前、三角地帯付近では、雄勝方面から釜谷地区へ向かおうとする車両に対して雄勝方面（釜谷トンネル方面）へ戻るよう誘導が行われていた関係から、方向転

換する車両に遮られるなどして、車が詰まる状態になっていた。

（４）学校裏山の倒木について

震災当日の学校裏山について、余震により「山の方で木が倒れたりする様子を見た」旨の証言があることから、裏山の倒木について調査を行った。

大川小学校の裏山には、本検証の過程で行った現地調査（平成２５年６月１５日及び９月２７日）において、多数の倒木の存在が確認できた。これらの倒木の原因と時期について、植物学の専門家の助言にしたがって写真撮影し、その写真を提供して意見を求めたところ、次のような見解を得た。

- 写真を見る限り、倒木の樹幹や葉の劣化状態は、比較的軽微なものからかなり進行したものまで様々な段階が観察されるため、倒れた時期の異なるものが混在していると推定される。過去１～２年以内に倒れたと考えられる比較的新しいものもある一方で、震災の時期かそれ以前に倒れていたと考えられるものもある。
- 一般に、枯死木を除けば、地震の揺れで樹木が中折れするなどして倒れることは考えにくい。ただし、樹木の生えている場所に地割れや土砂崩れが発生した場合は、これにより倒木が生じることはあり得る。
- 写真では同一方向に倒れる樹木群が見られることもあわせて考えると、地震や津波による倒木ではなく、強風を原因とする倒木である可能性が高い。宮城県内では、震災以降も台風などによる強風が複数回発生しており、大川小学校の裏山に現存する倒木は、こうした強風によるものであると考えられる。

なお、震災当日、裏山において地割れや土砂崩れが発生していたという証言はなく、また震災直後に裏山の捜索を行った消防団の関係者によると、捜索の際に地震による地割れ、土砂崩れなどの形跡は見受けられなかったとのことである。

以上のことから、現地調査において確認された多数の倒木は、震災以前から倒れていると考えられるものも含めて、強風等を原因として発生したものとみなされる。

３．２．２　津波の来襲状況

（１）津波の到達時刻に関する情報

大川小学校付近へ来襲した津波の到達時刻は、以下のように判断される。

北上川の河口付近へ到達した津波は、北上川の堤防の陸側を主として陸上を遡上した津波と、北上川の河道を遡上して新北上大橋直下の右岸から越流した津波の、大きく２つに分けられる。一般に陸上を遡上する津波は、河道を遡上する津波に比較して遡上速度が遅いことから、これら２つの津波の大川小学校付近への到達時刻も、北上川からの越流が先で陸上を遡上した津波が後である。

国土交通省の設置した水位計のデータによると、北上川を遡上した津波の第１波は、下表のように河川を遡上したものと推算される。これらの時刻は、水位計の記録が残されている「福地」と「飯野川上流」は分単位で正確であることが確認されたが、他の時刻については推算値である。

北上川を遡上した津波のそれぞれの地点付近への到達時刻（斜体は推算値）

		月浜第一水門	新北上大橋	大川中学校	福地	飯野川上流
河口からの距離(km)		2.0	3.7	4.8	8.6	14.9
到達時刻	立ち上がり	*15:22*	*15:26*	*15:28*	15:37	15:51
	ピーク	*15:28*	*15:32*	*15:34*	15:42	15:55

※斜体は福地・飯野川上流の水位計記録に基づく遡上速度と河口からの距離から算出した推算値。

河川を遡上した津波が堤防を越える高さだったことに加え、新北上大橋のトラスに流木や船舶などが滞留してダムのような状態になっていたこともあいまって、堤防からの越流が生じた。また、越流開始の時刻は、水位計のデータから推算した新北上川大橋への到達時刻である１５時２６分（立ち上がり到達時刻）から１５時３２分（ピーク到達時刻）までの間だった。

一方、大川小学校に残されていた時計については、現存しているもの２点と、震災直後に撮影された写真によるもの１点の計３点の情報が得られた。これらはそれぞれ１５時３８分５３秒、１５時３７分４６秒、１５時３６分４０秒で停止しており、その平均停止時刻は１５時３７分４６秒であった。これらの時計は陸上を遡上して大川小学校付近に到達

した津波によって停止したものとみなされる。

（２）地域住民等による主な目撃証言

津波来襲の際に三角地帯や学校周辺の釜谷地区内にいた地域住民等への聴き取りの結果、釜谷地区に来襲した津波に関して、主として以下のような証言が得られた。

釜谷地区の県道よりも北上川寄りの地域では、新北上大橋からおよそ５００ｍ下流付近までの間において北上川を遡上する津波が目撃されていたほか、津波に押し流されて川を遡上する船舶や、富士川の堤防からこぼれ落ちる黒い塊の津波も目撃されている。

また、大川小学校から新北上大橋へ向かう県道付近からは、北上川の堤防を越流する津波が住民や児童によって目撃されている。これらの証言の中には、堤防を越えて来たしぶきをあげる津波が手前にある２階建て家屋よりも高いものだった、堤防を越えたあとに大きな音をたて砂埃をあげていた、などと述べるものがあった。

さらに、三角地帯付近にいた住民等もまた、新北上大橋のたもと付近から、津波が堤防を越流する様子を目撃している。この越流前には、表面張力のように、水面が堤防よりも高い状態がある程度の時間、続いていたとの証言もあった。

一方、陸上を遡上する津波については、釜谷地区内の東南にある溜め池（蛇沼）から富士川への用水路が通る付近の路上から、家屋とほぼ同じ高さの波が音を立てて建物を破壊しながら、海側から三角地帯方向に向かって進む様子が目撃されている。また、大川小学校付近においても、やはり家屋と同じくらいの高さの津波が、県道を海側から三角地帯方向へ向けて遡上していったという証言も得られた。

大川小学校の裏山に避難して助かった証言者の中には、津波の来襲直前、大きな音とともに突風のような風を感じたという者が少なくない。また、堤防を越流する津波を見てから裏山へ駆け上り、そのあと少ししてから津波に巻き込まれた、などの証言も得られている。

（３）釜谷地区に来襲した津波の挙動

以上から、釜谷地区に来襲した津波の挙動は、次のようなものであったとみなせる。

北上川の河口付近へ到達した津波のうち、河川を遡上した津波は、堤防を越える高さまで到達し、新北上大橋に樹木等が滞留した堰効果とあいまって、堤防を越流して釜谷地区に来襲した。３．２．４に後述するとおり、地域住民等の多くはこの越流を目撃して避難

を開始しており、越流津波は人々に強い恐怖感・切迫感を抱かせるものであるとともに、堤防近くの家屋等を損壊させる程度の威力を持っていた。

河川を遡上した津波が堤防を越流した数分後、陸上を遡上した津波が釜谷地区の中心部付近に到達した。この津波の高さは数メートル、水量は膨大なもので、到達直前には突風をもたらし、大きな衝撃音とともに建ち並ぶ家屋を次々と破壊する威力を持っていた。大川小学校の校舎における津波痕跡はＴ．Ｐ.[9] 約１０ｍであり、屋根まで全てが水没したわけではないものの、校舎内で安全に避難できる場所はなかった。大川小学校にあった時計は、この津波の浸水により停止した。

大川小学校の児童・教職員をはじめ、同校付近で犠牲になった人々は、北上川の堤防を越流した津波と、その後に陸上を遡上して来襲した津波の両方に巻き込まれて被災した。

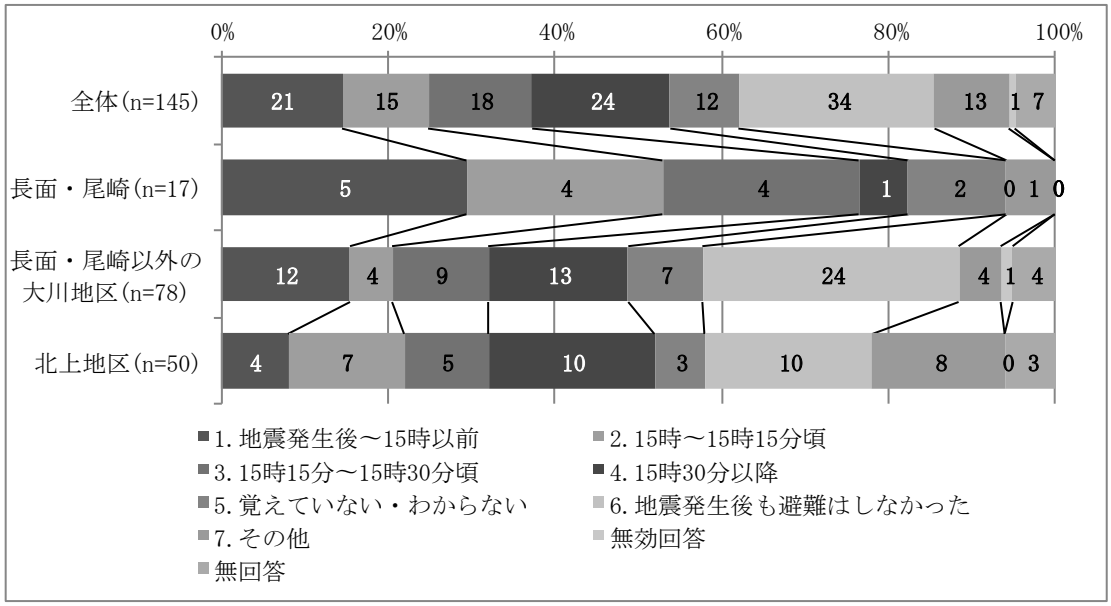
[9] Ｔ．Ｐ．とは、東京湾平均海面（Tokyo Peil）の略で、日本国内で標高の基準となる海水面の高さのこと。東京湾中等潮位とも言う。

３．２．３　地域住民の避難と被害状況

（１）地域住民の避難行動

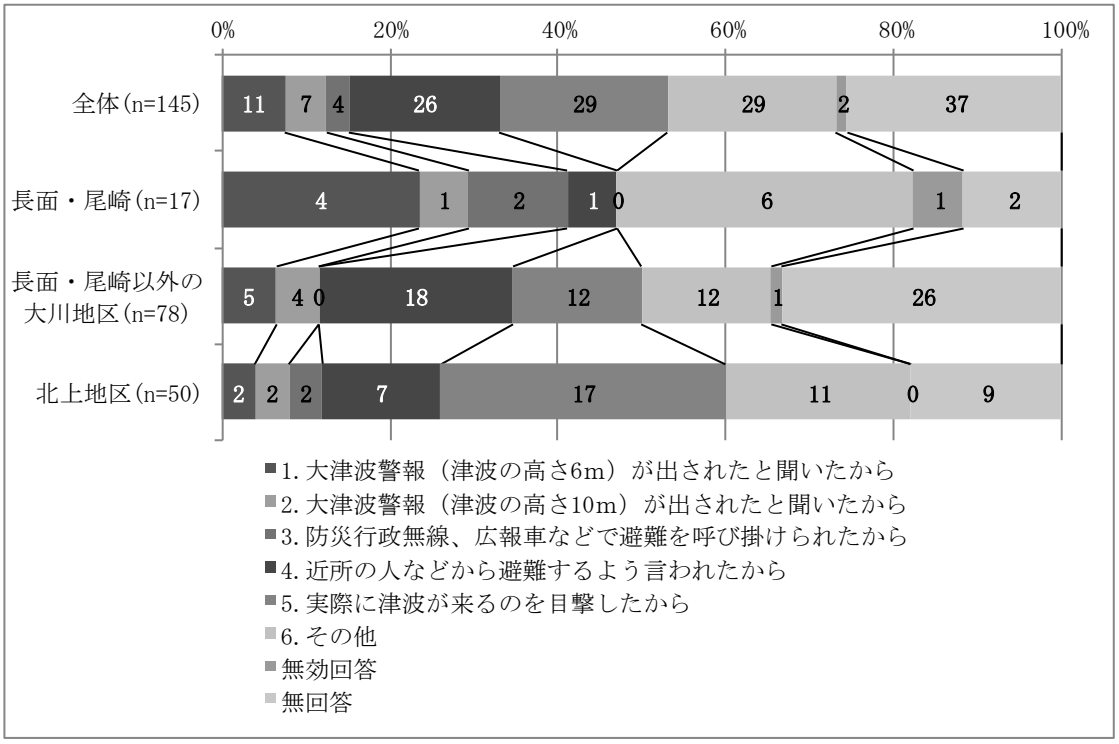
大川地区・北上地区の地域住民を対象としたアンケート調査において、震災当日、自宅周辺にいた方（有効回答数１４５）を対象として、当日の避難行動について尋ねた。この結果は以下のとおりである（詳細は付属資料２を参照）。

まず、地震発生後の避難開始時刻について尋ねたところ、津波来襲より早い１５時１５分頃までに避難を始めた人の割合は、全体で約２５％であったが、うち長面・尾崎地区で最も多く（約５３％）、次いで、北上地区（同２２％）、長面・尾崎地区以外の大川地区（同２１％）となった。



地震発生後の避難開始時刻

また、避難のきっかけに関しては、長面・尾崎地区では大津波警報や防災行政無線、広報車での避難の呼びかけをきっかけに避難を開始した方が約４０％である一方で、長面・尾崎以外の大川地区や北上地区では、「近所の人などから避難するよう言われたから」「実際に津波が来るのを目撃したから」といったきっかけで避難を開始した方が約４０～５０％であった。



避難開始のきっかけ

（２）釜谷地区住民の被害状況

行政区としての釜谷地区（入釜谷の一部、谷地中を含む）で津波により犠牲となった住民等の人数は、１９７名とされている。ただし、この中には、震災当日は地区外にて入院・入所生活を送っていた住民、地区内の診療所勤務者、地区内の住民宅を訪問していた当該住民の親戚なども含まれている。一方、地区内の賃貸住宅に居住していた住民の一部や、地区内に勤務していた在勤者は含まれていない。

このため、大川小学校近隣における津波による人的被害の全体像を整理するため、遺族、地域住民などからの聴き取り及び情報収集を行った。この結果をもとに、地震発生から大川小学校付近へ津波が来襲するまでの間、地区内にいた（若しくは地区へ来訪していた）住民等の被災状況を整理した（下表）。

なお、この整理にあたっては、以下のような考え方で集計対象を選択した。

- 釜谷地区のうち、地形的にやや離れた入釜谷については、間垣の堤防を越流し破堤に至らしめた津波で被災したと考えられることから、集計には含まない。
- 小学校以外の被害を整理するため、小学校の児童・教職員と、来訪者のうち小学校へ児

童の引き取りに来た保護者等は、集計には含まない。

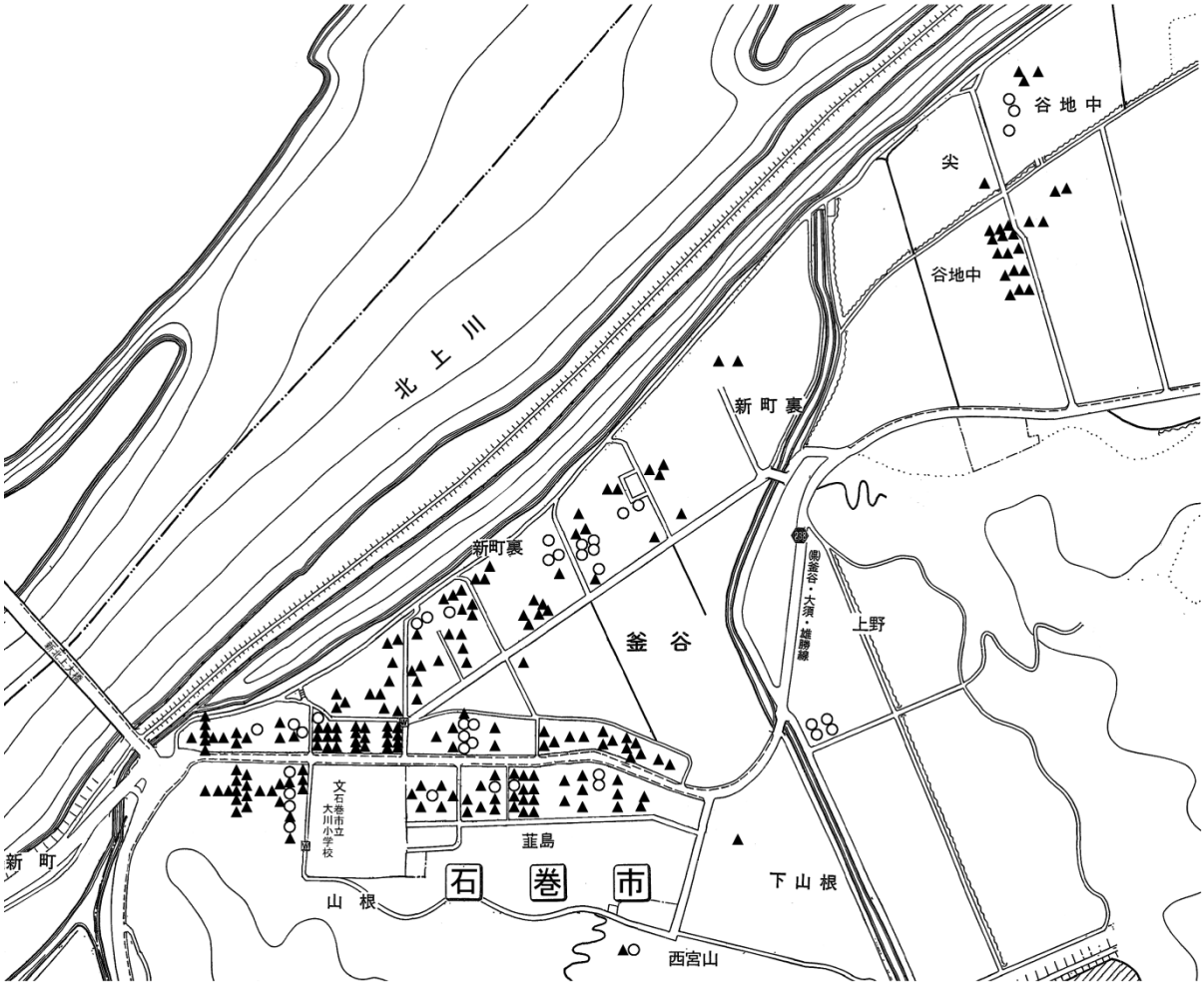
また、地区内の在勤者や来訪者については、聴き取り等から得られた範囲のみに限定されることから、必ずしもすべてを網羅できているとは限らない。この点も含め、表中の数値には、一定の不確実性が残されていることに留意する必要がある。

釜谷地区（入釜谷を除く）における住民・在勤者等の被災状況
（聴き取り等によって得られた情報に基づく）

単位：人

	住　民	在勤者	来訪者	計
死　者	１７５	２	４	１８１
生存者	３４	６	１１	５１
計 （死亡率）	２０９ （８３．７％）	８ （２５．０％）	１５ （２６．７％）	２３２ （７８．０％）

また、この結果を、住民の場合は自宅、在勤者・訪問者の場合は勤務先・訪問先として、地図上に示したものが、次図である。ただし、これは必ずしも津波来襲時にこの場所にいたことを示したものではない。



【凡例】▲：死亡・行方不明、○：生存

印の位置は自宅及び勤務先を示しており、その場所で被災したとは限らない

釜谷地区（入釜谷を除く）における住民・在勤者等の被災状況図
（聴き取り等によって得られた情報に基づく）

３．２．４　大川小学校付近における地震発生後の対応

（１）広報等から得ていた情報

地震発生から当日１７時までの間、宮城県沿岸に対して出された津波警報の発表・変更状況は、次表のとおりである。なお、これとは別に、地震発生の直後、１４時４６分４８．８秒（最初の地震波検知から８．６秒後）には緊急地震速報が発表されている。

宮城県及び近隣への津波警報（予想される津波の高さ）発表状況

発表時刻 津波予報区	１４：４９	１５：１４	１５：３０	１６：０８
青森県太平洋沿岸	１ｍ	３ｍ	１０ｍ以上	１０ｍ以上
岩手県	３ｍ	６ｍ	１０ｍ以上	１０ｍ以上
宮城県	６ｍ	１０ｍ以上	１０ｍ以上	１０ｍ以上
福島県	３ｍ	６ｍ	１０ｍ以上	１０ｍ以上
茨城県	２ｍ	４ｍ	１０ｍ以上	１０ｍ以上

【出典】「気象庁技術報告第１３３号 平成 ２３ 年（２０１１年）東北地方太平洋沖地震調査報告」（平成２４年１２月）

■ 津波警報（大津波）
□ 津波警報（津波）

地震直後から、各報道機関は、テレビ・ラジオを通じてこれらの警報発表を報道するとともに、各地の津波の来襲状況などについて報道した。大川小学校付近において、ラジオ又はテレビのワンセグ放送で視聴可能であったと考えられる主な情報を、次ページの表に示す。なお、表中の放送時刻は、繰り返し同じ内容が放送される中で最も早い時刻を示す。

一方、石巻市提供資料によると、同校を含む旧河北町の地域では、河北総合支所から防災行政無線による２回の広報（同じく次ページに示す）が行われた。

地域住民に対するアンケートでは、大川地区住民の約３５％が「防災行政無線の放送は流れていなかった」と回答しているが、一方で約１割が「聞いたことをはっきり覚えている」又は「聞いたような気がする」と回答している。また、地震後に大川小学校の校庭で、防災行政無線による「大津波警報発令」の広報を聞いたとする具体性を持つ証言も得られた。

事故当日にテレビ・ラジオ等から放送された内容

（繰り返し放送された場合、時刻は最も早い時刻）

時 刻	報道内容（概要）
14:50	宮城県太平洋側に大津波警報
14:51	予想される津波高 6m、予想到達時刻は午後 3 時
14:53	石巻鮎川の予想到達時刻午後 3 時 10 分
15:00	津波観測：岩手県大船渡港（14:54 20cm）
15:02	津波観測：宮城県石巻市鮎川(14:52 50cm)、岩手県釜石港(14:56 20cm)
15:14	（テレビ画面のみ）宮城県：第一波到達確認、予想される津波高 10m
15:16	釜石市で車が流されている（屋外カメラ映像を説明）
15:18	大船渡市で津波が川を逆流（屋外カメラ映像を説明）
15:20	いわき市小名浜で、道路が冠水（屋外カメラ映像を説明）
15:21	（ＦＭラジオ音声）新しい情報では予想される津波高 10m。
15:21	釜石市で道路に大きな船が流れている（屋外カメラ映像を説明）
15:21	女川で、屋根のひさし付近までの波、車を押し流す、およそ 3～5m（屋外カメラ映像を説明）
15:22	いわき市小名浜で、車が流されている（屋外カメラ映像を説明）
15:25	津波観測：岩手県釜石港(15:21 4m20cm)、岩手県大船渡港(15:15 3m30cm)、宮城県石巻市鮎川(15:20 3m30cm)、岩手県宮古港(15:19 2m80cm)
15:26	気仙沼で、白波が渦巻き、海面なのか陸上なのか不明（屋外カメラ映像を説明）
15:29	気仙沼で、大きな船、建物の屋根など流されている（屋外カメラ映像を説明）
15:32	（ＡＭラジオ音声）宮城県で津波の到達確認。予想される津波高 10m以上。
15:36	宮古 4m、大船渡 3.3m、釜石 4.2m、鮎川 3.3m などの津波確認

注）協力を得た報道機関からの情報をもとに作成。このほか、情報提供を得られていない報道機関による放送もあることから、上記がすべての報道を網羅しているわけではない。

河北総合支所による防災行政無線の広報

	時　期	広報内容
1回目	発表直後 （１４時５２分）	大津波のサイレンを放送 「只今、宮城県沿岸に大津波警報が発令されました。 只今、宮城県沿岸に大津波警報が発令されました。 海岸付近や河川の堤防などに絶対近づかないでください。 繰り返します。（以上をもう一度繰り返し）」
2回目	沿岸部に津波が押し寄せているとの情報を得た後 （１５時１０分頃※）	サイレン無し、チャイムを鳴らし 「現在、宮城県沿岸に大津波警報が発令中です。 現在、宮城県沿岸に大津波警報が発令中です。 海岸付近や河川の堤防などには絶対近づかないでください。 繰り返します。（以上をもう一度繰り返し）」

※河北総合支所では、報道機関の放送のほか消防無線の傍受が可能であったが、「沿岸部に津波が押し寄せている」との情報の入手元が不明であり、この時刻は正確ではない可能性がある。

さらに、関係機関提供の資料等によると、少なくとも次の公的機関の車両が、大川小学校周辺で広報活動を行っていた。

時　期	広報内容
１５時１５～ ２０分頃	河北消防署の消防車が、新北上大橋から長面地区方面へ走行しつつ、「大津波警報が発令されています。避難して下さい。」という内容を広報。
１５時２５～ ３０分頃	石巻市河北総合支所の公用車が、長面方面から新北上大橋方面へ戻りつつ「松原を津波が抜けてきたので避難して下さい」という内容を広報。

このうち、河北総合支所の公用車が行っていた広報については、これを聞いた地域住民が「尋常ではない言い方だった」と証言している一方で、公用車の走行した県道から畑をはさんで約２５０ｍほど離れている自宅付近の屋外にいた住民の中には、「何か言っていたが、内容は聞き取れなかった」と証言する者もいた。また、公用車の走行する速度も、かなり速かったと証言する者もいる。

（２）河北総合支所等による避難誘導

地震発生と大津波警報の発表を受け、河北総合支所からは計５台の公用車が広報等のために支所管内の各地区へと向かった。うち３台は、沿岸部（尾崎・長面地区）への避難誘導広報や水門閉鎖のため、職員６名が二人体制で分乗して、１４時５５分から１５時くらいまでの間にそれぞれ支所を出発した。この職員６名がこうした対応をとることは事前計画に定められていたものではなく、３台の役割分担も特に決まっていたわけではなかった。これら公用車は、３台とも防災行政無線（移動系）の車載器を搭載しており、さらに１台には消防無線の受令機があった。また２台には車外に向けて広報する拡声器が備え付けられていたが、うち１台は故障により使えない状態だった。

また、これとほぼ同時期にあたる１４時５６～５７分頃、河北消防署からも署員１名が広報車で出発し、新北上大橋を経由して釜谷地区及び長面・尾崎地区で津波広報を実施した。この広報車は、新北上大橋を通過後、釜谷地区内の県道を長面方面に移動しながら「大津波警報が発令されています。避難して下さい。」と継続してマイクで避難を呼び掛けた。消防の広報車が大川小学校前を通過したのは、１５時１５～２０分頃である。

支所職員Ａ及びＢが乗って長面方面へ向かった公用車では、消防無線から「津波警戒隊は

すべて避難せよ。」との情報を得た。他２台の公用車は消防無線を傍受できなかったことから、各車に無線でその情報を伝えた。また、新北上大橋上を走行中に「女川に津波が到達」との情報[10] を得た後、釜谷地区を長面方面へ向けて走行する際に、スクールバスが県道上を長面方面を向いて止まっているのを見た。

支所を３台目に出発した公用車に乗っていた支所職員Ｃ・Ｄは、１５時２３分頃、体育館に避難者の受け入れが可能かどうか確認するため、大川小学校に立ち寄った。これは、前年のチリ地震で大津波警報が発表された際、同小の体育館に沿岸部からの避難者を受け入れた経緯があったためである。校庭にいた教職員に確認したところ、体育館は照明器具落下の危険性があるので受け入れできないとの回答であった。このとき対応した教職員は教頭であるとされ、このやりとりの中で支所職員側から「大津波警報が出ている」ことに触れた可能性はあるものの、それ以外に津波に関する情報のやりとりはなかった。またこのとき、校庭にいた顔見知りの地域住民の一人と支所職員との間でも会話を交わしたが、その内容は「ご苦労さまです」というあいさつ程度で、被害状況や津波に関する情報のやりとりなどはなかったと証言している。

支所職員Ａ・Ｂは、谷地中付近を走行中、長面の松林の木々の間から白く光るものが突き抜け、さらに次の瞬間に波しぶきを立てて津波が松林を超えてくるのを視認して、Ｕターンした。谷地中で「松原を津波が抜けてきました。」と広報し、谷地中を過ぎてからスピードを出して釜谷地区中心部に向かった。釜谷地区中心部の入口から三角地帯の信号機辺りまで「松原を津波が抜けてきたので避難して下さい。」と避難を呼び掛けながら、時速４０km 程度でゆっくり走行したと証言している。釜谷地区の県道沿いに７、８名の地域住民がいたが、避難する様子はなかった。

一方、支所職員Ｅ・Ｆの乗るもう１台の公用車が谷地中から１００ｍ程度釜谷寄りのところを走行していたとき、前方から職員Ａ・Ｂが乗った公用車が戻ってきた。職員Ａ・Ｂは車の窓を開け、「津波だ、逃げろ。」と叫んだ。支所職員Ｅ・Ｆは、松林を超える白い波が見えたため釜谷方面へＵターンした。同職員は、この時の白い波は高さ１８～２０ｍの松林を超えるものであったと証言している。新北上大橋方面へ戻る際、学校のスクールバスは県道向きで校地内に入っており、運転手はバスの脇にいた。学校付近の県道には、子どもを迎えに来た保護者の車が数台停まっていた。

---

[10] 支所職員はこの情報を消防無線から得たと証言したが、その情報内容から判断して、消防無線ではなく、１５時２１分頃に放送されたラジオ放送である。

支所職員Ｃ・Ｄは１５時２４分頃、学校を出た。学校付近に車が４、５台駐車していたので、スクールバスの運転手に誘導してもらい、バックして県道まで戻った。運転手は、校庭脇で地域住民と話をしたり、車の誘導をしていた。谷地中から戻ってくる職員Ａ・Ｂが乗った公用車と郵便局付近ですれ違った後、釜谷霊園の辺りを走行しているときに、長面方面から走行してきた一般車両から「津波が来るから、この先には行くな。」と緊迫した様子で言われ、釜谷方面に引き返した。Ｕターンしているときに、富士川の堤防から水が漏れており、堤防上を船が津波に押されて流されているのを見た。「これは危ない、大変だ。」などと感じつつ県道を戻ったところ、三角地帯手前の最上屋前付近まで数台の車が詰まっており、その先で他の支所職員が車の誘導をしていた。このため、詰まっている車を避けるように反対車線に出て、三角地帯まで出た。

このようにして合流した支所職員Ｃ・Ｄを最後に、支所職員６名の乗った３台の公用車は、いずれも三角地帯に到着した。６名のうち１名が車内に残って避難を呼び掛け続け、他の職員は車から降りて間垣方面から釜谷方面に進もうとする車を雄勝方面へ誘導した。誘導にかかった時間は、１台あたり１５～３０秒程度であった。

支所職員Ｃ・Ｄが数台の車を誘導し終えた頃、川の水面は堤防の高さを越えるほどになり、新北上大橋付近に船が流れてきた。雄勝側の斜面はコンクリート吹付の法面が続いて登れないため、職員らは山の雑木林とコンクリート法面の境目付近を登った。新北上大橋から水の塊が富士川に流れ込み、次の瞬間、富士川から三角地帯に水が溢れてきた。６名の支所職員のうち車内に残って広報を続けていた１名が逃げ遅れて津波にのまれ、別の１名も津波をかぶって衣服が濡れた。支所職員の一人は、山の斜面に登った後、間垣の堤防が、川に面していない側から縦に崩れ、さらに全体が崩壊するのを目撃した。

（３）地域住民の避難行動

地震発生後、地域住民の多くは釜谷交流会館に避難し、大川小学校に避難した地域住民はそれほど多くなかった。地震後、通りを歩いていて、顔見知りの住民に「学校か釜谷交流会館に避難するように」と勧められたとする証言や、高齢者や寝たきりの住民を釜谷交流会館へ移動させていたとする証言がある。一方で、県道を長面方面から戻りながら津波来襲を告げる支所公用車の広報を聞きながらも、避難行動をとらなかった住民もいたとの証言もある。

津波来襲時に釜谷地区にいて避難できた地域住民の多くは、津波が来襲したのを実際に

見たり、津波来襲を見た人の「津波だ」「高い所に逃げろ」との避難の呼び掛けに応じたりして避難しており、津波来襲を確認する前に避難した者は少数である（次表参照）。防災無線や支所公用車からの避難の呼び掛けは聞こえなかったという証言も少なくない。

助かった釜谷地区住民の避難のきっかけ

（当時、釜谷地区にいて助かった住民等５１名中、詳細な行動が判明した３０人について）

避難開始のきっかけ	人数
津波そのものを目撃して （内、釜谷地区内の低地・三角地帯で一度止まった人）	１０人 （２人）
津波を目撃した人に言われて （内、釜谷地区内の低地・三角地帯で一度止まった人）	１７人 （１１人）
津波について見聞きする前に	３人
計	３０名

証言を得られた地域住民の避難行動の経過は、以下のとおりである。

①地域住民Ａ

堤防付近に自宅のある地域住民Ａは、近所の住民が堤防から水がこぼれてくるのを見て「津波が来ているのでは？」と言ったのを聞いた。自ら富士川の堤防に登ってみたところ、北上川の堤防から水がこぼれているのが見えたため、近くにいた近所の住民たちに「子どもたちを車に乗せて逃げろ」と呼びかけた後、自分も車に乗って堤防沿いの道路を通り、釜谷交流会館方面へ向かった。釜谷交流会館には、既に地域住民数名が集まっていた。「津波が来るから逃げろ」と呼び掛けたが、誰も逃げようとしなかった。そのうちに後ろからバリバリとすごい音がした。津波に追いかけられながら、釜谷交流会館の横の竹やぶから山に登った。山に逃げる途中、釜谷交流会館の駐車場の奥に、移動している児童の後ろ姿（最後尾）を見た。このとき、校庭には何人かの大人が残っていた。

②地域住民Ｂ

地域住民Ｂは、地震後、自宅の片付けをしていたが、余震で外へ出た。自宅の畑からポツポツと水が浮いているのを見た。夫が堤防に登ってみたところ、川を遡上する三角に盛り上がった津波が見え、船も流れてきた。夫に「逃げろ」と言われ、家族とともに走って交流会館に向かった。山に逃げる前、児童が校庭に並んでいる姿が見え、「三角地帯に移動し

ます」と言っているのが聞こえた。竹やぶ付近から山に登ったが、途中で上から水をかぶり、津波にのまれた。

③地域住民Ｃ

地域住民Ｃは、余震の後、家族に勧められ、自宅から釜谷交流会館へ避難しようとした。釜谷交流会館前で地域住民Ａが「山に逃げろ」と言っているのを聞き、津波が来ているのを確認しないまま、山に向かった。山にたどり着かないうちに津波にのまれ沈んだが、次に来た波で山に打ち上げられた。その直後に、すごい音がして、建物が流され、トタン等がぶつかる音が何分か続いた。子どもたちの「助けて」という声も聞こえた。

④地域住民Ｄ

地域住民Ｄは、地震後に外出先から自宅に戻り、高齢の家族を乗せて、車で釜谷交流会館に向かった。学校と釜谷交流会館の間の道路で地域住民らが「津波が大きい」などと話していたので、高いところに逃げた方がよいのではないかと思った。以前、家族と「宮城県沖地震で津波が来たら雄勝峠に避難したほうがいい」と話したことを思い出し、本当に津波が来るとは思わなかったが、Ｕターンして県道を通り、三角地帯を抜けて雄勝峠方向へ向かった。後に、津波が釜谷地区を襲ったのは自分たちが出発してからすぐだったと聞いた。

⑤地域住民Ｅ

地域住民Ｅは、地震後に外出先から自宅に戻り、家族のうち数名を大川小学校に避難させた。その後、毛布等を積み、車で釜谷交流会館へ行った。県道から学校と釜谷交流会館の間の道路に入るところで、地域住民が交通整理していた。知人から、一人暮らしの人や寝たきりの人を交流会館に連れて来ていると聞いたため、自宅にいた要介護の高齢者を交流会館に連れてこようと考え、歩いて自宅に戻ろうとした。知人達と話している際、校庭から「三角地帯まで移動します」と声を掛けているのが聞こえた。交流会館と学校の間の道路を歩いて自宅に向かい、学校の自転車小屋の手前あたりまで来たときに、正面の県道を越えた先に大土手（北上川の土手）から跳ね上がる水が見えた。跳ね上がった水の高さは、道路両脇の家（ほとんどが２階建）より高かった。恐怖心からすぐに背を向け、山に向かって走った。山に向かって走り始めてすぐに、バリバリと家が壊れる音が聞こえ、そのまま津波にのまれた。「三角地帯に移動します」という声を聞いてから、津波が来るまでは数分だった。

⑥地域住民Ｆ

地域住民Ｆは、何かを放送しながら長面の方に向かう広報車を見たが、スピードが早くて何を言っているのかわからなかった。広報車は長面方面から戻ってきたが、このときも何を言っているのか聞き取れなかった。防災無線も全く聞こえなかった。堤防の様子を見に行った２軒隣の住民から「津波が来た」と知らされ、続いて地域住民Ａから「早く逃げろ」と言われた。そのため、家族らと車で避難した。釜谷交流会館と学校の間の道路には、釜谷交流会館に向かう地域住民の姿が見えた。自分達も釜谷交流会館に行くべきか迷い、最上屋の前で停止した。そのとき、右斜め前方向に堤防側へ通じる細い道路の正面にある富士川の堤防から津波が溢れているのが見えて怖くなり、高い場所に避難することにして発進した。三角地帯のバス停辺りで、支所職員２名が雄勝方面に車を誘導していた。雄勝方面から来る車と雄勝方面へ行く車が詰まって数秒停止した。新北上大橋の上流と下流の両方で、堤防を越えて波が溢れてくるのが見えた。後部座席に座って後ろを見ていた家族が津波が来たと大騒ぎになったため、詰まっている車を避けるような形で三角地帯を通り抜け、雄勝方面へ進んだ。

⑦地域住民Ｇ

地域住民Ｇは、地震時にいた外出先から自宅へ戻り、自宅裏にエンジンをかけたままで車を停めていた。自宅裏にある富士川の堤防を超えて黒い水が溢れるのを見て、車に乗り、県道へ出た。県道沿いには数人の地域住民が立ち話をしていた。三角地帯を抜けて雄勝方面へ向かう道は数台の車が数珠つなぎになっており、新北上大橋にぶつかった波のしぶきが車にかかった。渋滞した箇所を抜けるとき、間垣方面で車や家が流されているのを見た。

⑧地域住民Ｈ

地域住民Ｈは、新北上大橋のやや上流にある作業場で、地震後の片付けをしていた。音がしたので外に出ると、新北上大橋に津波が来ていた。間垣の堤防上で、地域住民がそれを見ていた。何度か波をかぶったが、建物の陰に入ったり、窓枠にしがみついたりして助かった。その後、三角地帯の方へ歩いていったところ、斜面の上から支所職員に「また津波が来ている」と声を掛けられ、手を貸してもらって斜面を登った。

（４）校内における対応

①地震発生と一次避難

地震が発生した１４時４６分頃、大川小学校では、全学年がその日の授業を終えていた[11]。得られた証言によると、１年生と５年生は教室で「帰りの会」の終わる直前、４年生は教室で歌の練習をしていた。また２年生、６年生は帰りの会が終わってすでに解散していた。地震発生前に、子どもを迎えに来ていた保護者が校内ですれ違った６年生児童から元気に「さようなら」と挨拶されたという証言や、下校途中の一部児童の姿を校外で見かけたという証言がある。３年生については、すでに帰り支度を済ませていたと見られる状況がある一方で、「帰りの会の終わる頃だった」という証言もある。

校内にいた教職員のうち、担任クラスを持たない教職員Ａ（教務主任、生存）は更衣室、教頭と教職員Ｂは職員室にいた。またクラス担任のうち教職員Ｃは、児童を迎えに来た保護者と話をするために渡り廊下を体育館側へ移動している最中だったが、他のクラス担任はほとんどが受け持ちの教室にいた。校長（生存）は当日の午後に休暇をとって不在にしており、また、教職員Ｄ（生存）は用務のため校外にいた。さらに、地震発生時には数名の保護者が、子どもの迎えなどのために校内あるいは学校付近にいた。また下校する児童を待つスクールバスが、尾崎・長面方面へ向かう第１便（１４時５８分出発予定）のため、県道上を東に向いて止まっていた。

児童は、地震の発生と同時に机の下に隠れた（一次避難）。１～２年生のいる低学年棟の教室からは「怖い～」「お母さ～ん」などの泣き声が聞こえたが、３年生以上の教室は比較的静かだったという証言がある。しかし、高学年の教室でも、混乱して不可解な行動をとったり泣き出したりする児童もいた。一方で、高学年では、２日前の地震で同様の経験をしていたことが教職員に指示される前の円滑な避難につながったとの証言もある。

クラス担任たちは、受け持ちの児童に声を掛け、揺れが収まるまで一次避難を続けるように指示をしたり、泣き出した児童を落ち着かせようとした。例えば、教室をやや離れていた教職員Ｃは、すぐに戻って自分のクラスと隣のクラスに「机の下へ」などと一次避難を指示した後、付近にいた保護者にも身を守るように伝え、教職員Ｅは、揺れの最中も教室の入口付近に立ち、落ち着いて子どもたちの様子を見守っていたという証言や、教職員Ｆ

---

[11] 石巻市教育委員会提供資料によると、震災当日の「帰りの会」終了予定時刻は全学年１４時３５分だったとされている。一方、この週は卒業式の予行演習などが入っていたため授業時間短縮の措置がとられており、通常より早めに終了していたのではないかとの証言もある。

は泣きだした児童をなだめていた、などという証言がある。児童同士も、互いに声を掛け合い、揺れが収まるまで避難を続けた。

教職員Ａは地震発生後、急いで更衣室から職員室に移動してジャケットをはおり、私物の携帯電話をそのポケットに入れた。その後、教頭と相談の上で、揺れが続く中、校舎内を走り回って一次避難を呼び掛けた（停電で校内放送は使えなかった）。この際、まず低学年棟の１～２年生の教室に声を掛け、続いて２階に上って３年生以上の教室に声を掛けた。

②校庭への二次避難

３分ほど続いた揺れが収まったのち、教職員Ａは、さらに校庭への二次避難を呼び掛けた[12]。児童たちは、クラス担任による誘導の下、１～２年生は教室の窓から直接、３年生は県道側の階段を降りて昇降口から、４～６年は体育館側の階段を降りて体育館側出口から、それぞれ校庭へ避難をした。

校庭への避難の際、すでに帰りの準備が終わっていた児童を除き、ほとんどの児童が室内での服装のまま、避難訓練と同様に、ランドセル等の持ち物を持たずに校庭へ避難した。ただし、ヘルメットをかぶったり手に持ったりして避難した児童もいた。

校庭では各学年２列に並んだ。各学年がどこに並んだかについては、学年順で体育館側が高学年だった、学年順だったが逆に体育館側が低学年だった、規則性がなかった、校庭へ避難してきた順番に道路側から並んだなどという様々な証言がある一方で、途中で並び替えたという証言もあった。

児童らが校庭に出てそれほど時間がたたない頃に、校庭の道路側に設置された防災行政無線子局から「大津波警報発令」の広報が流れた（市の記録によると、これは１４時５２分とされている）。複数の児童がこれを聞いたと証言している。

③二次避難後の校舎内の確認等

一方、児童らに二次避難を呼び掛けた教職員Ａは、その後、校舎内すべての教室・トイレなどを回って、残っている児童がいないことを確認した。校舎内では、ガラスが割れるなどの大きな被害はなかった（一部、ガラスが割れる音がしたとの証言もある）ものの、廊下では防火扉が閉まっていた。職員室では棚の上のものが散乱したり、鍵を一括管理して

[12] この際に教職員Ａが「山へ」と呼び掛けていたとする児童の証言があるが、当委員会として、当人から直接これを確認することはできなかった。

いたキーボックスが落下して鍵が散乱した状態だった。

教職員Ａは、１５時少し前頃には校舎内の確認を終えて校庭に出て、教頭らに残留児童がいなかったことを報告した。その時点では、校庭における（クラス担任らによって行われた）人員確認は終わっていたとの証言がある。教職員Ａは、このとき教頭らに「山へ行くか」という趣旨の問いかけをしたが、この状況では難しいのではないかという意見が出されたと証言した。

その頃、校庭には、体育館への渡り廊下の下や自転車小屋の脇などを通って、校庭に地域住民が避難してきていた。その人数は、多くても数名から十数名程度であった。校庭でこれら地域住民がいた場所としては、自転車小屋付近のタイヤ遊具付近や、校庭の中でも釜谷交流会館に近い側という証言がほとんどである。

教職員Ａは、避難してきた住民の様子を見て体育館への受け入れを考え、体育館の状況を確認しに行った。体育館１階の入口はすべて施錠されており、その鍵が入っていたキーボックスは地震により落下・散乱して特定が困難だったため、外からではなく内側から解錠するために校舎側から２階の渡り廊下を通って体育館に入った。渡り廊下は継ぎ目に段差が生じており、また、渡り廊下から体育館に入るドアは変形したためかなかなか開かなかったため体当たりをして開けた。体育館の中は天井の部材などが落下しており、また校舎側１階入口扉を内側から開けて外に出ると、付近に設置されていた暖房用灯油タンクの継ぎ目から灯油が漏れていた。また、余震のたびに２階の窓ガラスが大きく揺れるなどしていたため、体育館の窓ガラスは落下の危険があると教職員Ａは考えた。

このため教職員Ａは、体育館内へ入ろうとする住民数名に対し、危険であることを伝え、体育館から離れるように言った。また、校庭に戻り、教頭らに対して、体育館は使用できないことを伝えた。

④二次避難後、１５時１５分頃までの校庭の状況

校庭に出た教職員らは、それぞれが担当するクラスの付近にいて、児童の面倒をみるなどしていた。余震による激しい揺れで、悲鳴をあげる児童、泣き出す児童もいた。低学年を中心に泣いている児童が何人もいたため、教職員はこれを落ち着かせようと「大丈夫だよ」「怖がらなくていいから」などと声を掛けた。中には嘔吐する児童もいて、担任の教職員Ｇがその世話をしながら励ましていたとの証言もある。

児童のそばにいるだけでなく、複数の教職員は指揮台（朝礼台）周辺に集まって話し合っ

ていたとする証言も多い。ほぼ全員の教職員が集まっていたという証言もある一方で、数人が指揮台周辺に集まり、それ以外は児童の列を囲むようにしていたという証言もあり、指揮台周辺で相談に加わっていた教職員の人数は証言によって異なるものの、教頭や教職員Ｅなど、高学年の担任や比較的年配の教職員が集まっていたとの証言がある。

指揮台の付近では、教職員がラジオを聞いていたとの証言がある。一方で、少なくとも職員室にあったＣＤプレーヤー付きラジオは、地震の揺れで落下して使えない状態だったため持ち出されておらず、ラジオは聞いていなかったとする証言もある。

１５時少し前くらいから、地震発生時に校内あるいは学校付近にいた保護者が、引渡しを求め始めた。教頭が引渡しを記録するよう指示し、教職員Ｂが校舎内から名簿を取ってきたという証言がある。引渡しは、当初は教職員Ｃが記録を担当して始められ、スムーズに行われた[13)]。また、引渡しのために長机が準備されていたとの証言もあるが、一方で、そのような机には気づかなかったという証言もある。

迎えに来た保護者は、互いに知っている者同士が大津波警報が出されていることを伝え合ったりしており、複数の顔見知りに対して「津波が来るから逃げて」と伝えた者がいたと証言する者もいる。また、中にはラジオ等で聞いた津波に関する情報をもとに、これを教職員に伝えて「山へ」と避難を促す保護者もおり、同人は、その際に教職員から「お母さん、落ち着いて」と言われたと証言した。しかし一方で、児童を引き渡された後もしばらく校庭に残って知り合いの保護者などと話をしている保護者や、学校に来たものの子どもの引渡しを受けずにまた学校を離れた保護者もいた。また、教職員から「落ち着くまでここにいた方がいい」「学校の方が安全なので帰らないように」と言われたとする証言もある。

この間、教職員Ａは、校外にいる校長や市教育委員会へ何度も電話をかけたが、つながらなかったとしている。そこで、数日前に災害時優先電話となる避難所特設電話のコネクタが体育館階段下に設置されたことを思い出し、職員室から接続用の電話機を持ち出して接続を試みた。しかし、コネクタ部に鍵がかかっていたか、あるいは物が倒れたりしていたか、なんらかの理由で接続はできず、電話を利用することはできなかった。

１５時１０～１５分頃、スクールバスの運転士が、同僚運転士と無線で交信している。その交信の中で、スクールバス運転士は「学校の判断が得られない」と述べ、これに対して交信相手の同僚は「自分の判断で避難しろ」と伝えたと証言している。また、これとほぼ同

13) 最終的には２７名の児童が引き渡された。内訳は、１５時１５分頃までに引き渡された児童１８名、それ以降に引き渡された児童５名、引渡し時期不明の児童４名である。なお、これらのうち１名は、親族以外（別の児童の保護者）に引き渡された。

じ頃、長面地区に住む保護者の一人が自宅へ帰る途中で大川小学校の前を通った。この保護者は、停車中のスクールバス近くにいったん停車して、顔見知りだったバスの運転士に「子どもは送ってもらえるのか？」と聞き、運転士から「待機している。（子どもを自分で連れて行くかどうか）自分で判断した方がいい」という返事を得た。

⑤この間の校庭における教職員・児童の会話内容など

校庭での二次避難を続ける児童の間では、防災行政無線で「大津波警報発令」を聞いたこともあってか、避難直後から「津波が来るのかな」「ここは海岸付近かな」「来てもたいしたことないだろう」などと津波のことが話題になっていた。中には、２日前に起こった地震を受けて保護者から「大きな地震の際は津波が来るから山へ逃げろ」と教えられていたため、教職員に「山に登るの」と尋ね、「登れないんだよ。危ないからダメなんだ。校庭にいた方が大丈夫だよ。」と言われた児童もいる。また事故後、亡くなった子どもの様子を複数の児童に尋ね、いずれの児童からも「亡くなった子が山への避難を強く教職員に訴えていた」と聞いた保護者もいる。

避難直後は１学年２列ずつに整列してしゃがんでいた児童たちは、引渡しが進むにつれて人数が減っていったこともあり、時間の経過とともに徐々に列を崩していった。教職員から「丸くなっていい」と言われて輪になったという証言もあるが、特に指示がないまま自然と輪になって話をするようになったとの証言もある。

児童の中には、２日前の地震で校庭へ避難した際には何も起こらなかったことから、当初はそれほど強い不安は感じていなかったものの、天候が悪化して雪が降り出す中で徐々に不安感が増し、また当初は津波の心配をしていたが徐々に自宅のことを気に懸けるようになったとする証言もあった。また、繰り返す余震のたびに「おぉ～！」という声が児童の間で広がったりもしていた。余震が怖いため、輪になった児童は、互いに手をつないだり、「大丈夫だぞ」などと励まし合ったりしていた。しかし一方で、一部の児童が校庭の端にある樹木の付近で遊び始めたとする証言や、子ども同士の会話内容はゲームやマンガ、翌週の時間割のことなど日常的なものだったとする証言もある。児童から得られた証言の中には、教職員から何の指示も出されなかったので、待つしかなかった、遊ぶようになった、などと述べるものもあった。

一方、この間も教職員は、校庭に来た地域住民も交えて相談していた。地域住民のひとりは、「津波が来る」などと言いながら、校門から校庭方向へ走る姿を目撃されている。時

期は明らかではないが、この相談の中で、山に危険がないかどうかを教職員が地域住民に相談していたという証言や、教頭や教職員Ｇが「校庭は危険だから、どこかに移動した方がよい」という趣旨の発言をしていたという証言もある。

また、これも時期は明らかではないが、校庭より若干敷地の高い釜谷交流会館の駐車場へ移動してはどうかという提案が地域住民から出されたが、駐車場は校庭よりも狭い上に、余震による建物被害の危険性があるのではないかという判断から、移動はしなかったとする証言もある。

⑥１５時１５分頃から三次避難開始まで

地震直後から降り出していた雪の影響もあって、寒さへの対応を行う必要が出てきた。教職員Ａは、低学年棟の１～２年生の教室からジャンパーなどの服を持ち出して児童に渡したり、一部、引き渡す児童の荷物を教室から取り出すのを手伝ったりしていた。児童の中には、担任だった他の教職員に上着を持ってきてもらったとする証言もあることから、同じように対応した教職員もいたようである。

１５時２０分過ぎ頃、当初から引渡し対応の中心的役割を担っていた教職員Ｃが引渡しの担当を外れ、他の教職員が代わる代わる担当するようになった[14]。引渡しを交代した教職員Ｃは、昇降口付近に置かれていたかまどと薪を運搬用の一輪車に乗せ、校庭へ運んだという証言がある。

この頃（平成２３年６月３日付けでファクス送信された教職員Ａから保護者宛ての手紙では、「サイレンが鳴って、津波が来るという声がどこから（引用注：原文まま）聞こえて」来た後とされている）、教職員Ａは、教頭や教職員Ｅに「山に逃げますか？」と声を掛けたが、これに対して何らかの返答や指示はなかったと証言している。このため教職員Ａは、自分が校内にどこか安全に避難できる場所がないか探すと伝え、再び校舎内へ入った。配膳室の内壁に設置されたタラップを登ると出ることのできる屋根の平坦部も考えたが、配膳室の扉も屋上へ通じる扉も施錠されており、鍵が散乱して特定できないことから断念し、主として２階に安全な避難先を探した。

１５時２３分頃、長面地区の住民の避難を念頭に、大川小学校の体育館が受け入れ可能かどうかを、河北総合支所の職員が確認に来た（３．２．４（２）に前述のとおり）。対応

[14] どの教職員が引渡しを担当したか確認できる児童１３名のうち、１５時２０分頃までに引き渡された１０名の内訳は、教職員Ｃが７名、教職員Ｈが２名、教職員Ｉが１名だった。これ以降は、教職員Ｃが０名、教職員Ｈが１名、教職員Ｅが１名、教職員Ｊが１名になっている。

した教頭は、落下物等が多く危険なため利用ができないと伝えた。市職員が校内にいたのはごく短時間（１～２分）で、体育館への受け入れに関する会話以外には特に会話はしなかった。この市職員の乗る公用車は、県道へ戻る際にスクールバスの運転士に誘導を受けている。この直後頃、県道上に停車していたスクールバスが、バックで正門から校地内に入ったとみられる。

この頃に児童の引渡しを受けた保護者は、学校を車で出て、三角地帯から新北上大橋を渡った。この保護者は、橋の上から津波の立ち上がりと思われる白波が橋の下あたりに見えたと証言し、また、同乗者は遠く下流に一段と高い波が押し寄せている様子が見えたと証言した。

⑦三次避難から津波来襲まで

その後、１５時３３～３４分頃になって、校庭からの三次避難として、三角地帯への移動が決定された。移動開始に際しては、教頭をはじめ教職員が児童らに指示を出したという証言がある。また、地域住民が「三角地帯に移動します」と呼び掛ける声を、学校付近にいた地域住民が聞いている。

移動経路は、自転車置き場の脇から道路Ａに出て、釜谷交流会館の駐車場を横切って民家宅地内の通路へ向かい、その先を右に曲がって県道を目指すというものだったという証言がある。移動開始から列の先頭が交流会館の駐車場入口付近にさしかかる頃までは、校庭にいた地域住民が先頭付近を歩き、そのあとに児童が続いていたため、その移動速度はかなりゆっくりだったとする証言があるが、児童の中には、移動の際に地域住民の姿は見なかったとする者もいる。また児童の一人は、自分が校庭を出る頃から、付近に教職員Ｉがいたと証言している。

校庭からの移動開始に際して、教職員Ｋが一人、移動後に引き取りに来た保護者への対応のために校庭に残ったという証言がある。また、移動を開始した頃、教頭は児童たちの進む経路を進まず、道路Ａを県道の方に向かった。教頭は、その後すぐに戻ってきて、「津波が来ていますので皆さん急いでください」と児童らに声を掛けた。

その頃、教職員Ａは、校舎内の２階で比較的安全に避難できそうな場所を特定して、校庭に出た。その際、教職員Ａへの声掛けがないまま児童らの移動はすでに始まっており、先頭は釜谷交流会館の駐車場付近、最後尾が校庭のタイヤ遊具のあたりにいて、移動している児童たち以外は校庭に人影がなかったと証言している。教職員Ａは、避難する列を小

走りで追い、付近にいた人（特定できないが成人）にどこへ向かうのか聞いたところ、三角地帯へ移動することにしたとの回答を得たと証言している。このときの移動速度は、早足程度だったという証言がある。

津波が来ているから急ぐようにとの教頭の声掛けを受け、列は乱れ、小走りで先を目指した児童もいた。校庭から１５０ｍほど移動して県道に差し掛かったあたりで、一部の児童らは新北上大橋直下付近から津波が越流し、付近の家を破壊した様子を目撃した。この津波を目撃した児童らはあわてて来た道を走って戻り、正面にあたる山の斜面を駆け登った。この付近の斜面は急だった上に、雪が積もっていたためにとても登りづらかったという証言がある。なお、県道まで到達していなかったために津波を目撃していなかった児童らは、逃げ返ってきた児童らがなぜそのような行動をしているか理解できない様子だったとの証言もある。

一方、教職員Ａは、列の最後尾付近にいて、釜谷交流会館の駐車場から出たあたりか、その少し先あたりにいた。教職員Ａの証言による、津波の来襲状況と教職員自身の対応は、以下のとおりである。すなわち、後方（学校の校庭側）から強い風が吹き、同時に雷のような、離陸する飛行機のエンジン音のようなゴーという音が聞こえたため、児童らの列が向かう先の県道をふと見ると、家屋の高さくらいで長面方向から三角地帯方向へ移動する津波が見えた。この時点では、県道部分以外には津波は来ていなかった。少し前まで走って先を進んでいた児童らに大声で「こっちだ、こっちだ！山だ、山だ！」と声を掛け、これに気づいた数人の児童が山へ走り出したのを見て、教職員Ａも叫びながら山へ駆け上がった。

この直後、教職員や児童のいた付近一帯を津波が襲った。教職員Ａ以外にも、津波来襲の直前、突風のような風を感じたり、飛行機の音のような大きな音を聞いたとする者が少なくない。

（５）山への避難状況

①教職員Ａと児童１名の避難状況

教職員Ａの証言によると、津波来襲時の山への避難状況は、次のとおりである。教職員Ａは、山の斜面を登ったところで、倒れてきた樹木に身体の一部が挟まれ、頭から水をかぶった。斜面の上の方から児童の声が聞こえたため、「上に行け、走れ」などと叫んだ。その後、挟まれていた部分から抜け出すことができ、自身も斜面を上へと登っていったが、

その過程で眼鏡などを失った。

教職員Ａは、山の斜面上で一人の児童と合流した。この児童も津波をかぶって咳き込むなどしていたとする証言があるが、一方で、児童は津波に濡れていないとする証言もある。

教職員Ａは、その後、怖がる児童とともに、安全な休める場所を求め、斜面の上へと３回ほど場所を変えながら移動した。さらにその後、時間経過とともに気温が下がったため、眼鏡を失ってほとんど目がよく見えない教職員Ａの「目の代わり」を児童が務めるようにして山中を移動したところ、林道を経由して、入釜谷側にある事業所まで到着することができた。教職員Ａは、すでにその時点であたりは暗くなっていたと証言している。

一方で避難場所を提供した事業所関係者は、教職員Ａらの到着はまだ明るいうちだったと証言している。また、この事業所関係者は、教職員Ａが到着後に、はっきりとは聞き取れない声で「大川小学校の...」と述べ、一緒にいた児童を大川小学校の児童であると紹介して挨拶させていたと証言している。さらに、このときに教職員Ａが「一人しか助けられなかった」と告げたこと、教職員Ａと児童がほとんど汚れていなかったため、負傷者や津波に巻き込まれて汚れた人のいる事業所側ではなく自宅の座敷に二人を通したことも、併せて証言した。

同じ座敷で教職員Ａと児童とともに一晩を過ごした避難者は、自分がこの事業所に到着した時はまだ薄暗い程度で、真っ暗というほどではなかったと証言した。この避難者によると、到着した当初は一緒に避難してきた人々とともに事業所側に通されたが、その後、「女性はこちらへ」と言われて座敷に案内されたという。この際、すでに教職員Ａと児童がいて、教職員Ａが自己紹介をしたため大川小学校の教職員であることがわかった。また、教職員Ａは倒れてきた木で肩などを痛めていたようだったが、汚れてはいたもののびっしょり濡れているような感じではなく、児童も特に濡れているという状況ではなかったとしている。

教職員Ａは、通された座敷で、余震のたびにストーブの火を消したりしながら、一夜を明かしたと証言した。翌朝、児童とともに前日に下った林道を上っていく途中、支所職員とともに山中で一晩を明かした児童らに出会った。

②児童２名及び支所職員等の避難状況

校庭からの三次避難中、児童２名は、津波を目撃して来た道を戻り、正面にあたる山の

斜面を登ろうとした。うち１名は、斜面を数メートル登ったところで振り返り、水が押し寄せてくるのを見てさらに登るべく再び斜面側を向いたところで、後ろから押し倒されるように津波にのまれて気を失った状態で半分ほど土に埋まった。もう１名は、津波に巻き込まれながらも水面に出ることができ、ちょうど流されて来た冷蔵庫に舟に乗るようにして入った。冷蔵庫が波に流されて山の斜面にたどりつき、斜面に降り立ったところ、付近に半分ほど土に埋まった状態の児童がいたため、負傷していたにもかかわらず、土を掘って助け出した。助けられる側の児童も、自力で土を押しのけて起き上がった。

一方、山に避難した支所職員５名は、当初、津波に巻き込まれて濡れた状態の地域住民２名とともにいた。支所職員のうち津波に濡れた１名と地域住民２名は、もう１名の支所職員に付き添われる形で、比較的早い時期に山を越えて入釜谷方面へ向かった。残る支所職員３名は、山の斜面を大川小学校側に向かう途中、付近にいた地域住民と合流した。数名ずつに声を掛け移動を手伝うなどした結果、地域住民に助けられた児童１名を含めた１０名が集まった。その後さらに、助けを求めていた児童２名に気づき、同様に連れてきた。

夜に入って、雄勝側から山を越えてきた１名が合流し、計１６名で山中で一晩を過ごした。斜面の中でもやや開けた場所に移動し、倒木を渡して椅子代わりにしたり、ライターで火を付けて焚き火をした。流れて来た布団袋の中に入っていた布団を利用したり、津波に巻き込まれていったん手放したが同じ場所に流れ着いた食料を分け合ったりした。一晩を過ごす中で、津波に巻き込まれて負傷していたとみられる地域住民１名が息を引き取った。

なお、まだ暗くならないうちに、支所職員らが大川小学校裏のコンクリート擁壁の上から「誰かいるか」と声を掛けたところ、津波で流されて学校の校舎にたどりついた地域住民から返事があった。「頑張れよ。」などと声を掛けたが、夜も余震や津波が続いたため学校まで下りることはできなかった。支所職員は暗くなった後も笛を吹いたり大声を出したりして捜索を続けたが、この他には助けを求める声はなかった[15]。暗闇の中、何度も津波が押し寄せた。遠くでチェーンソーのようなエンジン音が聞こえたという証言がある。翌朝、林道へ出て、入釜谷側へ山を下りた。

---

15) これとは別に、釜谷地区中心部の西側に位置する山中（稲荷神社付近）に避難した住民が診療所建物内に残った避難者の声を聞いたとする証言や、南西に位置する沼付近では夜間になっても津波に流された地域住民の声が続いていたという話を聞いたとする証言がある。

３．２．５　他の学校園における状況

（１）石巻市内の学校園における児童・生徒等の被害状況

石巻市内の、公立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において、死亡又は行方不明となった園児及び児童・生徒の数は、次表のとおりである。

市内全域において死亡・行方不明となった園児・児童・生徒は計１８２人であり、内１０９人が学校管理下であったが、このうち下校途中を除く７３人は、すべて大川小学校における被災であった。また、宮城県内で下校途中などを除く学校管理下の犠牲は７４人であり、大川小学校以外では１名のみとなっている。

石巻市の公立学校園における園児・児童・生徒の被害

宮城県教育委員会提供資料

	死亡・行方不明			左の内訳								
				学校管理下内			学校管理下外					
	死亡	行方不明	計	避難中	下校中等	計	学校休業	欠席早退	帰宅(地震前)	帰宅(地震後)	不明等	計
石巻市	166	16	182	73	36	109	0	6	44	18	5	73
内 大川小	70	4	74	73	0	73	0	1	0	0	0	1
【参考】宮城県全体	339	23	362	74	68	142	77	12	95	31	5	220

（２）石巻市内の小中学校の対応状況

石巻市立の小中学校６４校のうち、浸水した学校は２４校だった（次ページ表）。これらのうち、４校は校内に児童･生徒がいなかったため三次避難をしていない。したがって、何らかの三次避難をした学校は２０校となる。

２０校のうち、校舎の２階以上等の校地内に三次避難をした学校は１３校であり、大川小を含む７校（大川小、門脇小、船越小、谷川小、相川小、雄勝小、荻浜中）が校地外へ三次避難をした。

これら７校のうち、荻浜中は結果として体育館の一部が浸水した被害にとどまったため、仮に校地内へ三次避難をしていても助かったが、残る６校は水没するなどして大川小と同

様に校地外への避難が不可欠だった（門脇小は１階までの浸水だったが、漂着物による火災により焼失）。これらの学校のうち大川小を除く５校においては、学校管理下における児童の被害はない。それぞれの学校の特性と震災後の避難等の対応について以下にまとめる。

石巻市内で津波により浸水した小中学校の被災及び避難の状況

石巻市教育委員会提供資料をもとに作成

	基本情報					当日の状況								
	教職員	全校児童・生徒数	校舎の高さ	標高	海からの距離	浸水の程度	教職員死者数	死亡・行方不明児童・生徒数	うち学校管理下	発災時に学内にいた児童・生徒数	15:30頃に学内にいた児童・生徒数	三次避難した児童・生徒数	三次避難の状況	三次避難の場所
貞山小学校	23	273	総3階	—	—	1階				7	7	0	—	—
湊中学校	24	246	一部4階	—	—	1階	1	3					—	—
大川中学校	13	58	総3階	—	—	1階		3					—	—
開北小学校	27	419	総3階	0.5	3094	1階				413	80	20	校庭避難。消防から校舎倒壊の恐れの連絡。でも校舎１階へ移動。	校地内
荻浜中学校	12	27	一部3階	4.8	57	1階				24	24	24	県道沿い駐車場に避難。波の引きから山へ避難し、本校舎へ戻る。	裏山
住吉中学校	22	339	それ以上	0.4	3037	1階				50	50	100	校庭から体育館へ。浸水で校舎へ移動。避難車両整理と避難民対応。	校地内
山下中学校	26	319	一部4階	0.9	2078	1階				175	110	110	校庭から体育館へ避難。水があふれたので避難民と一緒に３階へ。	校地内
鹿妻小学校	22	430	一部3階	2	1031	1階		4	1	260	100	130	校庭から体育館へ避難。津波情報からギャラリと校舎へ住民と移動。	校地内
大街道小学校	22	407	総3階	1.5	1067	1階		2		400	120	150	校舎から体育館へ避難。津波情報で住民ともに校舎２・３階へ移動。	校地内
湊小学校	17	205	一部4階	0.7	1420	1階		1		130	150	150	校庭から校舎３階へ避難。避難住民（１２００名）２階以上。	校地内
湊第二小学校	17	235	一部4階	0.7	741	1階		3		165	165	184	校庭から校舎３階へ避難。本部立ち上げ、避難住民と共に対応。	校地内
住吉小学校	19	200	総3階	0.6	2511	1階				196	45	196	校庭から校舎３階へ避難。保護者と避難住民も同様。	校地内
門脇小学校	22	300	総3階	3.2	725	1階		7		約240	0	240	校庭から日和山へ。神社境内へ移動し引き渡し開始。石巻高校へ。	裏山
石巻小学校	25	279	一部4階	2.9	1555	1階				273	273	273	校庭から校舎３階へ避難。避難住民を２階に分け対応。	校地内
渡波小学校	27	453	総3階	1.1	703	1階		7	4	440	440	440	校庭から講堂へ避難。避難住民（１２００名）も一緒。	校地内
釜小学校	35	657	それ以上	1.3	1380	1階		25	23	559	514	514	校庭から住民と共に体育館へ避難。その後校舎３・４階へ移動。	校地内
渡波中学校	31	506	総3階	1.1	182	2階		6		5	11	11	駐車場から新校舎３階へ避難。必要物資収拾など避難者対応。	校地内
雄勝中学校	13	77	総3階	—	—	3階	1						—	—
吉浜小学校	12	49	総3階	1	167	3階	1	7	7	14	5	5	校庭から校舎３階へ避難。津波襲来で屋上へ移動。一夜を明かす。	校地内
船越小学校	8	22	総3階	6.7	214	3階				21	21	21	校庭から津波情報で峠に向かい避難。頂上から「憩いの家」へ移動。	裏山
谷川小学校	8	14	総2階	9.2	75	水没				12	12	12	体育館に避難。学校前の高台へ移動。その後、道路脇山へ登る。	裏山
相川小学校	13	73	総3階	2.9	153	水没		1		45	21	21	校庭から裏山へ避難。迎え保護者ともに、子育てセンターへ移動。	裏山
雄勝小学校	15	104	総2階	3.3	313	水没		1		45	37	37	新山神社へ避難。忠魂碑へ移動。さらに裏山からクリーンセンターへ。	裏山
大川小学校	13	108	一部2階	1	3679	水没	10	74	73	105	77	77	避難中に被災	高台

①門脇小学校

門脇小学校（児童数３００名）においては、地震発生時に２４０人ほどの児童が校内にいた。校庭に二次避難したが、大津波警報が発表されたことを防災無線等で知り、かねてより

訓練していたとおり、１５時過ぎには６年生を先頭に学校脇の階段を使って裏山にある日和山公園に避難した。避難に際しては、引き取りに来た保護者も同行させた。

②船越小学校

船越小学校（児童数２２名）においては、地震発生時に５人の児童が校内にいたが、１５時３０分頃にはいったん家に帰った児童が再び学校に戻ったことなどにより１１人に増え、加えて、地域住民５０人ほどが校庭に集まっていた。海が見えるところまで見に行った職員が海の状況を見て戻ってきて、「津波が来るぞ！」「走れ！」「上だ！」と伝え、学校脇の舗装道路を国道２３８号線まで登った。

③谷川小学校

谷川小学校（児童数１４名）においては、地震発生時に１２人の児童が校内にいたが、１５時３０分頃には地域住民５０人ほどが校庭に集まっていた。消防団員二人が校庭より低い位置と高い位置の２箇所で津波を見張り、津波の予兆を確認したあとに、学校脇の舗装道路を県道４１号線まで登った。地元の漁師が引き波の状況を見てさらに高い場所への避難を進言し、県道脇の山を登った（結果的には最初の三次避難場所である県道は浸水しなかった）。

④相川小学校

相川小学校（児童数７３名）においては、地震発生時に４５人の児童が校内にいたが、引渡しによって１５時３０分頃には２１人の児童が校庭にいた（何名くらいの地域住民が避難していたかは不明）。教師の一人が自分の車を校庭に移動させ、ラジオのボリュームを上げて共有。また、防災無線でも大津波警報を聞き、訓練していたとおりに学校の裏山へ避難。そこからさらに山を登れば山頂の子育て支援センターへ到達することを知っていた教員の先導で山を登った。

⑤雄勝小学校

雄勝小学校（児童数１０４名）においては、地震発生時に４５人の児童が校内にいたが、引渡しによって１５時３０分頃には３７人の児童が校庭にいた。加えて地域住民１００人ほどが避難していたと思われる。引き取りに来た保護者の一人から「雄勝湾の水が引いて海底が見えている。いつまでも校庭にいないで、早く神社に逃げて！」と強い進言があったことをきっかけに、マニュアルでも想定していた神社へ避難した。しかし、津波の来襲を目の当

たりにしてさらに高い場所へ逃げる必要性を感じ、山頂に道が通じていることを知っている教員の判断で山頂へ向かい、さらに奥のクリーンセンターまで１時間程度登った。

以上、大川小と同等に校地外への避難が不可欠だった学校についてまとめた。

続いて、大川小学校近隣の学校園のうち、津波来襲時に園児・児童・生徒等が学校園にいて避難をした学校園の中で、聴取への協力が得られ、かつ、報告書への掲載に同意を得られた学校２校について、避難等の対応についてまとめる。

⑥橋浦小学校

地震発生時には児童約９０名が校内にいた。校舎は特に被害がなかったが、裏山は一部が崩れたり、体育館のガラスは一部が落下するなどしていた。校庭への二次避難後、保護者への引渡しを開始し、また、雪が降り始めていたため、校庭の中央にテントを張って避難を継続した。大津波警報の発表はわからなかったという。１５時半頃、避難してきた地域住民を校舎２階に案内していた教職員が皿貝川を津波が遡上しているのを目撃して避難を呼びかけた。そのため、その時点でまだ残っていた２０名弱の児童とともに校舎の上階へ避難した。結果的に津波は校地内に浸水することはなかった。

⑦飯野川中学校

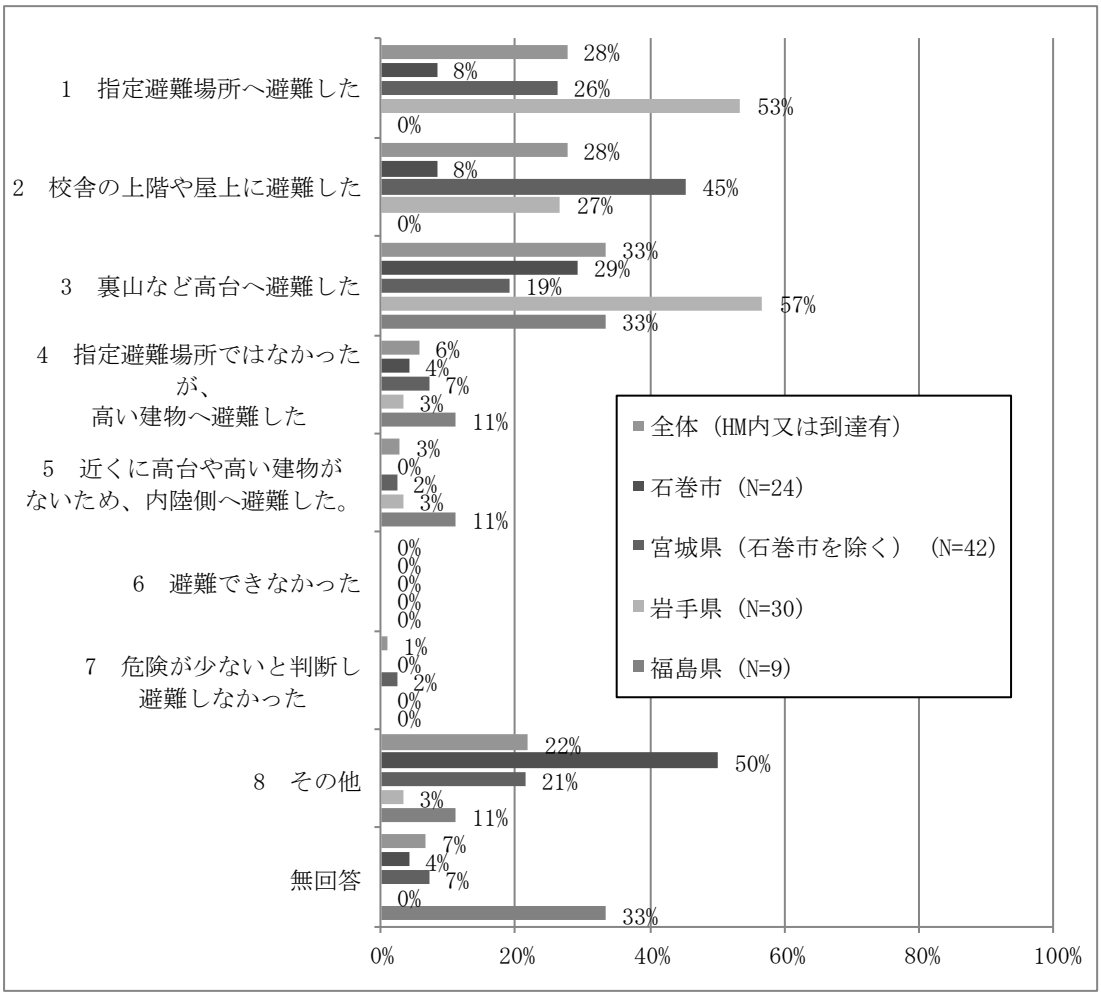
地震発生時、１～２年生のみ８０名程度が校内にいた。校庭に避難後、気温が低く雪が降りだしたため、安全が確認できた体育館に移動した。保護者への引渡しをしていると、地域住民が体育館に避難してきた。１時間ほどたった頃、学校に訪れた消防関係者から「大津波警報が発表されているので、八幡神社に避難するように」と言われた。その時点まで大津波警報の発表は知らなかったという。体育館にいた生徒と地域住民に避難を呼びかけ、一部の生徒と住民がそれに応じて八幡神社に移動した。結果的に津波は校地内に浸水することはなかった。

（３）被災３県における小中学校の対応状況

３．１．６（４）で紹介した被災３県アンケートでは、津波ハザードマップの予想浸水域内にあるか、若しくは東日本大震災で津波浸水を受けた学校を対象に、震災当日の避難行動について尋ねている（問３９）ことから、これを再集計した（詳細は付属資料３を参照）。

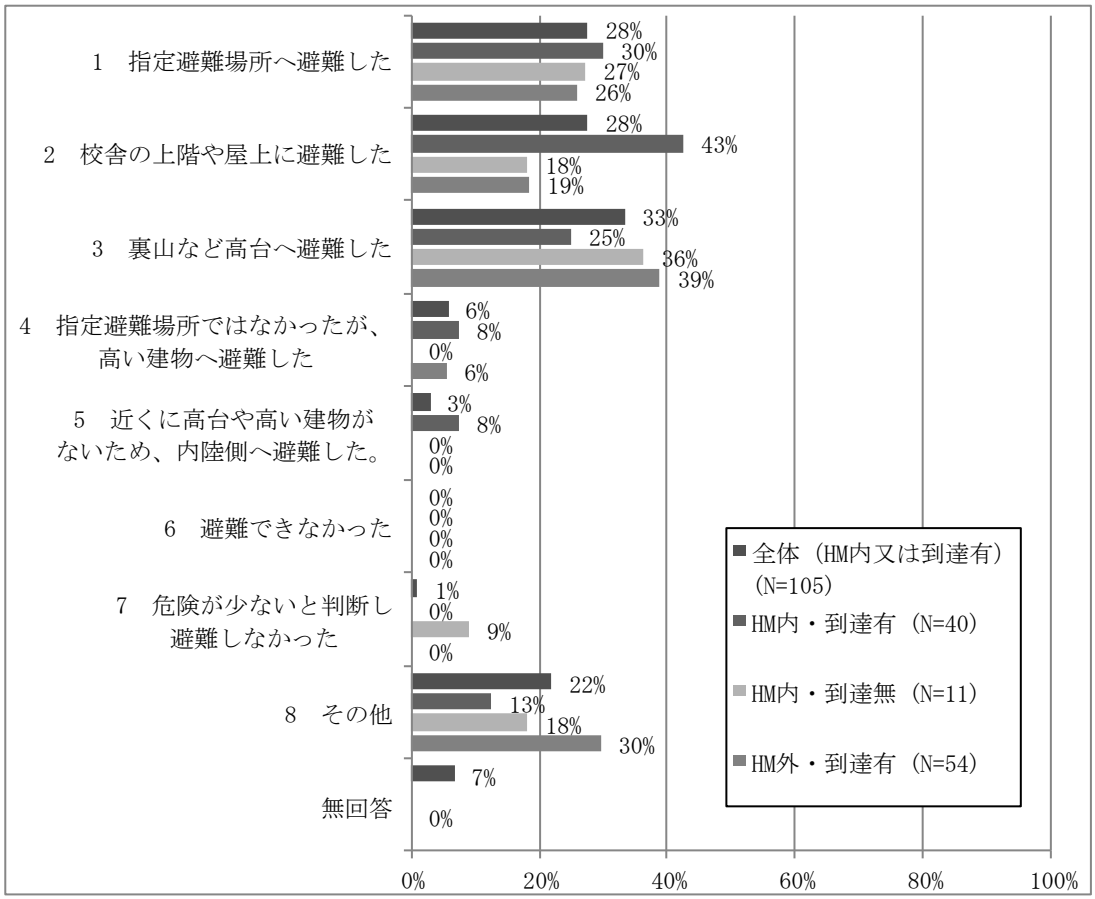
全体として、「指定避難場所」「校舎の上階や屋上」「裏山など高台」がいずれも３割前後となっているが、地域別に見ると、岩手県において「裏山など高台」への避難が約６割と目

立っている一方、宮城県（石巻市を除く）は「校舎の上階や屋上」に避難した学校が４割以上と多い傾向にある。これに対して石巻市では「その他」の回答が約５割と最も多く、次いで「裏山など高台へ避難した」という回答が約３割となっている。



〈被災３県アンケート問３９〉震災当日の避難行動（地域別）

また、ハザードマップ津波予想浸水域と実際の浸水状況別に見ると、予想浸水域内で浸水被害のあった学校では「校舎の上階や屋上に避難した」の回答が４割以上と最も多い。一方、ハザードマップの予想浸水域外にあって津波が来襲した学校では、「裏山など高台」という回答が約４割で最も多くなっている。



〈被災３県アンケート問３９〉震災当日の避難行動（HM内外・到達有無別）

（４）石巻市以外の小学校における避難事例

①山元町立山下第二小学校（児童数２０５名）

校舎１階まで浸水。地震の時、低学年児童はすでに帰宅した子もいたが、かなりの児童は掃除をするなど残っていた。地震後約１０分で校庭に避難させ、迎えに来た保護者に引渡しをしている時に、「何やっているんだ！津波が来るんだぞ！」「役場に急いで逃げろ！」と拡声器で学校に告げに来た役場の職員がいた。地震で防災無線塔が倒れ、機能しなくなったので、３km ほど離れて高台になっている役場の職員が、自転車で急いで連絡に来たのである。その情報に背中を押された校長は、急いで役場に避難することを職員に伝え、その時点で残っていた児童約１００人を連れて走り出した。低学年の子どもを先頭に駆け出したが、途中で教職員の車６台と、迎えに来た保護者の車数台に小さい子から乗せ、役場に急いだ。歩いていくと子どもの足だと１時間近くかかるところを、２０分ほどで高台の役場に全員到着した。

②南三陸町立戸倉小学校（児童数１０７名）

長く続いた地震の後「校長先生、高台ですね」と教頭の声。「はい、校庭への一次避難[16]は省いて、玄関前で点呼、即座に高台に避難します」と校長は叫んだ。揺れの中で考えていたことを指示した。家に帰った若干名の子を除き、校庭で遊んでいた児童も含め９１名の児童と教職員が三次避難場所の宇津野高台に駆け上がった。それが１４時５８分で、地震から１２分で避難した（地震に耐えた２分を除くと点呼も含め１０分で避難したことになる）。２日前の津波注意報が出たときもここに避難し、高台から海を見ながら震えていた。その経験が生き、全員が防寒着を持ち、養護教諭は毛布と薬品を、教頭は手動発電機のラジオを、教務主任は重要ファイルの入ったＵＳＢを抱え手際よく対応した。「今日も津波は来ないのか」と思い始めていた矢先に、町の防災無線が海の潮位を知らせ、固唾をのんで見守ると、沖合から波の壁がみるみる近づき、民家をのみ込み始めた。「ここも危ない」と考え、さらなる高台、五十鈴神社の階段を登るよう指示した。病人やお年寄り、それから保育園の園児などもいて、その人たちを支援しながら神社の境内に着いた。校長は当初、大学の専門家に相談したところ、津波は早い場合は３分でやってくることもあると聞いたので、校舎の屋上にするか随分迷ったが、地元出身のベテラン教諭の「絶対高台に避難すべき」との職員会議での発言に救われたという。「思い込みの想定判断はダメ」「臨機応変なその場での判断がどうしても必要」と指摘する。同時に、教師集団のまとまり、地域の人たちとの協働、人間の力が防災の要、とも教訓を言っている。

③釜石市立唐丹小学校（児童数７３名）

校舎３階まで浸水。地震時は、低学年（１・２年生）は１階の教室で帰りの会、３年生以上は卒業式の練習で体育館にいた。体育館は上からの落下物があり、すぐさま体育館を出て校庭に避難した。１・２年生も校庭に集まり、全員集まった所に、元消防団の保護者が顔を出し、「津波が来るから、今すぐ避難しろ！」と言いに来てくれた。校長も、職員室から校庭に駆けつけ、「この揺れはただ事でないから、津波は間違いなく来る」と思い、急いで緊急避難場所にしていた天照御祖神社に行くよう指示を出し、避難した。

④釜石市立鵜住居小学校（児童数３６２名）

地震発生時、欠席・早退は１２名であり、３５０名が在校していた。揺れが大きく長い

[16] 本報告書での二次避難に該当する。

ため早く津波が来ると思い、当初は３階に避難をしようとした。大津波警報が出され、隣の釜石東中の生徒が校外に避難を始めたので、付いていくようにして、校舎から７００ｍほどある高齢者介護施設Ａに駆け足で避難した。避難後、裏山の崩れを見て、地域の方の「もっと高台に！」との進言で、小学生・中学生、そしてその施設の入所者や職員約７００名がさらに上の介護施設Ｂまで５００ｍほど駆け足で避難した。その頃には先の介護施設Ａは津波にのみ込まれ、介護施設Ｂの近くまで津波が来ていた。子どもたちは、さらに高台にある石材店まで避難した。

⑤大船渡市立越喜来小学校（児童数７３名）

地震時には７１名の児童がいたが、激しい揺れと校舎と校舎をつなぐ螺旋階段が激しくぶつかる音がして、校外への避難を決行。震災前年の１１月に完成したばかりの津波避難用の非常通路を通って、二次避難場所の三陸鉄道の越喜来駅（標高約２０ｍ）に避難した。その昇降口を通ることで、わずか３分ほど（地震発生から６分）で駅まで避難を終えることができ、そこで確認の点呼を取る。またその時、防災無線から大津波警報の情報が聞こえてきて、海の様子も見えたので、さらに三次避難場所としていた山の中腹（約３００ｍ）にある南区公民館に避難する。地震発生から１５分ほどでそこに全員が移動し、その場から間もなく３階の校舎が完全に水没するのを目の当たりにする。非常用の通路が４カ月前にでき、津波の半月前にそこを使った訓練を実施し、また校庭点呼はせず二次避難場所を高台とし、さらに上の公民館が市の指定避難場所になっていたことが、迅速に無事対応できたことにつながった。

⑥岩泉町立小本小学校（児童数８８名）

校長は大きな地震で必ず津波が来ると察知し、すぐさま避難対応を考えたが、事前の津波対応ワークショップで、宮城沖地震だと津波が来るまで最低２０分の時間的余裕があることを知っていたため、児童らに落ち着いて対応するよう指示した。また、避難は長時間になることを予測し、服装準備をさせた上で避難させた。避難経路は、岩泉町の防災対策施策で平成２１年３月に近隣の山に設置された１３０段の階段である。過去にその経路で避難訓練も実施していた。階段は、子どもと地域住民の迅速な避難に絶大なる役割を果たし、設置前よりも５～７分早く避難できた。